

アカデミック・カフェの実践——市民参加  
の「書評カフェ」の組織——

担当教員：伊藤栄晃（関東学園大学経済学部経済学科教授）

参加学生（学籍番号・氏名）

演習 I 20911004 荒岡慎太郎  
20911010 小野関祐  
20911016 木村友里恵  
20911019 小林亮祐  
20911026 田中紀旭  
20911026 鄭詠澤  
20911028 中澤涼  
20911037 福田俊大  
20911041 矢島慎平

ソフオモアセミナー

21011030 新井健太  
21011024 金井延介  
21011026 川田翔  
21011043 高玉凌大  
21011050 千葉俊樹  
21011051 張業輝（齋藤業輝）  
21011054 寺口千尋  
21011067 松村豪  
21011073 山口健太

目次

本文

I 本プロジェクトの選定理由と目的	4 頁
II 「書評」カフェの実践：年間の行動記録	5 頁
III プロジェクトの成果と課題の考察	19 頁
文献リスト	20 頁
担当教員の講評	21 頁
註	21 頁

## I 本プロジェクトの選定理由と目的

### 1) アカデミック・カフェとは・書評カフェとは

アカデミック・カフェとは、大学人や専門職の人が街中のオープンな雰囲気のカフェつまり喫茶や軽食ができる店で、その場に居合わせた市民と、それぞれの専門の最新の話について問題を投げかけ、飲み物などを手に気軽な感じで語り合う、自由な知的交流の場です。

このようなカフェイベントの源流は、フランスの哲学者マルク・ソーテが 1980 年代初めにパリ近郊で始めた「哲学カフェ」にあるようです。この「哲学カフェ」は、当初ソーテの友人ら 10 人前後で始められましたが、しまいには 200 名もの人々が集まる大きな会合に成長したといわれています<sup>i</sup>。

また 1990 年代後半には、自然科学の最新的话题を市民に提供しようという、「サイエンス・カフェ」が、イギリス・フランス両国でほぼ同時に始められました<sup>ii</sup>。

このイベントに刺激を受けてのことと予想されますが、最近日本でも東京周辺や京阪神福岡県などで、盛んに「カフェ」が開催されています。

例えば東京と千代田区の専門学校「文化学院」では、毎月第 3 金曜日に「クリエイティブ・カフェ」を開き、参加費 500 円で学内の講師に話をしてもらっています。また大阪大学は京阪電鉄「なにわ橋駅」の地下 1 階オープンスペースを借りて、学内講師を招いて自然科学の話題を提供する「ラボカフェ」を月 10 回のペースで開いています<sup>iii</sup>。

これらのカフェは、何かと敷居の高かった大学と一般社会との垣根を越えて、大学での研究・教育の成果を市民に分かりやすく伝え、知的情報・知識の一般への還元と共有を図るものです。と同時に、市民の側から大学世界に自由な発想で刺激を与えるという相互作用が期待されてもいます。

「書評カフェ」とはそれら様々な形があるアカデミック・カフェの中では、一番簡便な形態のもので、要するに今話題の本や非常に物議を醸すような本、あるいはかつて出版されたがその価値が今ようやく再認識された本などを取り上げ、その内容について市民とともに語り合う会です。今回我々がプロジェクトとして取り組んだのは、この「書評カフェ」を太田市内で開催することでした。

### 2) プロジェクトの目的

関東学園大学は、昔から「地域への有用な人材の輩出」をうたってきた大学です。しかし地域との知的交流という点では、まだまだ十分な活動を展開していないのが現状です。そこでわれわれ伊藤演習 I・II そして同ソフォモアセミナーのメンバーは話し合い、この現状を何とか改善するため我々ができることの一つとして、書評カフェの実践を行うこととしました。

もちろん本格的なアカデミック・カフェが実施できればそれがベストだったのですが、いろいろ考えた末、今年は、それはあきらめました。まずそのような活動のノウハウの蓄積が、我々の身近なところでは、つまり北関東では全く見つからず、何をどうやったらいいか一から勉強してゆくしかなかったからです。また定期的にそれぞれの専門分野の最新的话题を、しかも分かり易く説明してくれるような講師を見つけることも、我々には全然見当もつきませんでした。それで担当の伊藤先生と我々だけで取りあえず実行できる書評カフェを選びました。

### 3) 課題

「書評カフェ」を始めるにあたって、我々が一番気になったのは、このイベントを実施できるようなオープンな雰囲気のお茶を飲める店で、このようなイベントを実施するのにご理解ご協力いただけるお店が太田市内に見つかるか、またイベントが太田の市民の皆さんに受け入れてもらえるかどうか、この2点でした。

といいますのも、これまでカフェイベントが行われているのは、フランス・イギリスはもちろん、日本国内でも大都市圏で、しかも主催しているのは学生数も多く、さまざまな研究分野の第一線の研究者をたくさん抱えている大きな大学だったからです。太田のような小さな地方都市でそのような都市型イベントが本当にできるのか、また知識・情報に乏しい我々に果たしてそのような知的イベントの主催が務まるのか、ということでした。

詳しくは次の章で紹介しますが、結果的にはそれらは杞憂でした。それはわれわれにとって本当にうれしい誤算でした。1番目の問題については、我々が手分けしてほうぼう電話かけや直接店長などと交渉して、3軒のお店にご協力いただけることになりました。また第2の問題についても、特に夏休み後の後期の会合では、常に数名程度の市民の方々のご参加を得ることができました。

## II 「書評」カフェの実践：年間の行動記録

次に本プロジェクトの1年間の行動記録を紹介します。

- ・ 4月～5月 : 演習Ⅰ・Ⅱとソフォモアセミナーの双方で、「書評カフェ」企画の実施について討論を行う。積極的にイベントをやってみたいというメンバーと、そのような企画は無理、あるいは自信がないというメンバーとの折り合いがなかなか付きませんでした。

そこで伊藤先生のご指導に従い、取りあえず結論は先延ばしにして、皆で市内のお茶を飲める店に手分けして当たってみて、協力が得られる店が見つかるかどうか交渉してみることにしました。もし協力店が見つからなければ、この企画は少なくとも今

年度は諦めることにしました。

初めにイーオンのテナントで入っている店何軒かに交渉してみました。太田市内では人通りが多く、オープンな形のお店も入っていて、市民がふらっと立ち寄ってくれそうな雰囲気といえ、まずはここだと思ったからです。

しかし、どこからもよい返事は得られませんでした。それらのお店はチェーン店なので、どこの店長さんからも本社・本部の了解が得られなければいけないとのことでした。しかし何人かの店長さんからは、うちでは難しいけれど、とても面白い企画だから、ぜひ頑張ると激励され、気を取り直して交渉を続けることにしました。

そこで次に、チェーン店ではなく独立したお店を探すことにしました。メンバーのアルバイト先なども含め、市街地の喫茶店を片端から当たりました。その結果、太田駅北口の東本町にあるフランス料理店「カフェ・ド・セラ」、やはり東本町にあり、スバルの工場の近くのジャズ喫茶「JAZZ&COFFEE N」、そして西矢島町の楽器販売・スタジオを兼ねている「Guitar Research Wood Stock」の3店がご協力頂けることになりました。3店のオーナー、店長さんには心から感謝申し上げます。

それでもメンバーからは企画を危ぶむ声が上がりました。この3店とも比較的小さなスペースのお店で、しかもオープンではないこと。また店の前は自動車こそたくさん行き交うが、歩行者はあまりないこと。そんな条件で、いろいろな人が入れ代わり立ち代わり出入りしながら自由に語り合うような趣旨のイベントが、本当にできるのか、という疑問でした。これについてもいろいろ話し合いましたが、結局は、結論は出ませんでした。最後は伊藤先生が取りあえずやってみようかとまとめ、駄目でもともとという感じで始めることにしました。

- ・ 6月 : そこで本の選定に入りました。メンバー各自が取り上げたい本を持ち寄り、議論を重ねました。当初は経済学部なのだから経済関係の本を、という感じで始めましたが、どう市民の皆さんにアピールしていいか、本当に迷いました。大体太田の街中で平日の午後にお茶しに来る人々といえ、年金世代の人が多いだろうから、それらの人々にいきなり経済だの政治だの本を紹介しても、難しいかもしれません。そこで、自分たちの専門にこだわらず、それぞれのお店に集まってくる人々の趣味・志向に合った本を選ぶことにしました。

まずジャズ喫茶「JAZZ&COFFEE N」では、スバルの工場に勤めている人が骨休めにコーヒーを飲みに来ることが多いと聞きましたので、現役世代の人が関心を持ちそうな、売れている話題のビジネスの本で、しかも柔らかい肩の凝らないものを、と思ひまして、岩崎夏海『もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら』を選びました<sup>iv</sup>。

次にフランス料理店「カフェ・ド・セラ」では、映画や文学など芸術系にうるさい年金世代の紳士淑女が多いと聞きましたので、一番話題の小説だった村上春樹『1Q84』を選びました<sup>v</sup>。そして「Guitar Research Wood Stock」は、もともと楽器

の販売・スタジオで、待っているお客さんにコーヒーをお出ししていたスペースを、喫茶に仕上げたばかりということでしたので、音楽に絡めて山本紀夫『ラテンアメリカ楽器紀行』を選びました<sup>vi</sup>。取りあえずこの形で、パイロット的に夏休み前に3店でカフェを実施することにしました。

その3回のカフェについて以下報告します。

第1回目 日時：2011年7月14日（木）15：30～16：30

場所：「JAZZ&COFFEE N」

本：岩崎夏海『もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら』

プレゼンター：金井延介

参加者：金井・松村・川田・新井・千葉（伊藤先生）

内容報告： 市民3人の方々と交流できました。まずはこの企画は何を目的にしたものか、説明が求められました。そこで川田君がアカデミック・カフェの企画趣旨を簡単に紹介しました。金井君の内容紹介では、主人公「みなみ」の心の動きと成長が強調されました。新井君は自分の野球部経験を紹介し、戦略の立て方の重要性つまりはマネージャーの役割の大切さを語りました。

市民の皆さんからは、この企画の実施自体を高く評価する旨の発言を多くいただきました。このようなカフェイベントは聞いたことがなかったし、太田の町は文化的なものという点で寂しいなあと感じることもないではなかったが、それに風穴を開けるような企画で大変期待したい、長く続けてほしい、とのコメントをいただきました。最後に参加者のおひとりで太田タイムス記者の「ふせじま」さまよりインタビューを受けました（伊藤先生が主に対応してくださいました）。その記事は後日記事として同紙に掲載されました。

第2回目 日時：2011年7月15日（金）時刻は上に同じ

場所：「Guitar Research Wood Stock」

本：山本紀夫『ラテンアメリカ楽器紀行』

プレゼンター：鄭詠澤

参加者：鄭・木村・中澤・荒岡・田中・小野関・小林（伊藤先生）

内容紹介：今回は、市民参加はなく、メンバーとオーナー夫妻との楽しい語り合いの場になりました。ラテンアメリカは楽器と音楽の宝庫といわれる理由を、鄭君が本とそれ以外の材料も示しながら説明してくれました。市民の方々がいなかったのは、

本当に残念でした。最後に伊藤先生がロード・ムービーの名作「ブエナ・ビスタ・ソシアルクラブ」のDVDを流してください、キューバ音楽の素晴らしさの一端に触れました。とくにオーナーご夫妻は、いたくそれを気に入ってくださいました。夏休み後もぜひ、カフェをうちでやって欲しいと申し出られ、それは大きな収穫でした。

第3回目 日時：2011年7月21日（木）時刻は上に同じ

場所：「カフェ・ド・セラ」

本：村上春樹『1Q84』

プレゼンター：張業輝

参加者：張（齋藤）・山口・高玉・寺口（伊藤先生）

内容紹介：話題の長編巨編小説ということで、意気込んで「セラ」に向かいましたが、その場にいたお客さんたちは年齢的にこの本が話題になっていることはもちろんこの本の題名自体も分からないご様子で、余り参加したくなさそうでした。実際カフェを始めても、おひとりもこちらのテーブルには来ていただけず、大いのがっかりしてしまいました。コーヒーはとてもおいしかったし、張君のかなり主観を交えた紹介も、（ずいぶん準備してきたんだろうけれど）、とても面白かったのですが、それだけに残念でした。コンセプトを考え直す必要があるようです。

### 3回の実験的カフェの実施の反省点と課題

第1回目は3名の市民と交流できた。とくに市民の方々から思いがけず高い評価と激励を受けて、非常に勇気づけられた。しかし、第2回・3回目では交流はできなかった。第2回目では、そもそもお店に客が一人もおらず、平日のこの時間帯には楽器を見に来たり、スタジオを借りに来たり人はあまりいないからとのこと、やむを得ませんでした。しかし第3回目の「カフェ・ド・セラ」では、お客は3～5名いたにもかかわらず、そしてメンバーが手分けして一人ひとりお客さんに企画の趣旨を説明し、参加をお願いしたにもかかわらず、まったく参加していただけませんでした。こちらについては、我々としては少し落ち込みました。

カフェ実施後「カフェ・ド・セラ」オーナーの小川様からはスイカをごちそうになりながら、これにめげずにいろいろ工夫してみるようにと、具体的なアドバイスをいただきました。例えば数週間前から会の趣旨を明記した



チラシを作っておくようにとのことでした。それらを店で、関心のありそうな客に配布してあげるからお申し出を受けました。大変にありがたいことでした。同様のお申し出は、「Guitar Research Wood Stock」からもいただきました。

本来我々はカフェイベントの趣旨として、全く行きずりの見知らぬ人々同士が、偶然に出会いひと時の知的交流を楽しむもので、大学で行う市民講座などとはその点で違うものと考えていました。そこで事前の宣伝広報というよりもその場に居合わせたお客さんに会の趣旨を説明し、関心がいただければ、参加をお願いするという形で進めたかったのです。

このやり方は確かに第1回目では通用しました。それはお店が適度に狭く、我々が市民の皆さんの席の間に割り込んだため、イベントに巻き込むことは容易くできたのでした。しかし第2回目の「カフェ・ド・セラ」は、客席が喫茶部とダイニング部とにはっきりと分かれ、我々は予約席としてダイニング部に回されたため、喫茶部からお客さんと呼び寄せることはできませんでした。

そのような大都市型の、しかも何度も回を重ね、市民の間にすっかりイベントとして定着した先例と同じことをやっていたのでは、このようなイベントには全く慣れていない太田の市民の方々には、なかなか振り向いていただけないことが分かりました。

そこで夏休み以降は事前広報に力を入れることにしました。当初プレゼンのための補助資料としては、そのような理由からレジュメだけしか作っていませんでした。それを改め、日時などとともに内容要旨を記したチラシを毎回事前に作成し、各お店にできるだけ早く持ち込み、お店に宣伝にご協力頂けるようお願いすることにしました。

またお店に集まるお客さんたちの志向をこちらで勝手にあれこれ斟酌して、本を選ぶことはやめ、とにかく市民の皆様に企画を知っていただくこと、関心を持っていただくことを最優先にして、今テレビとかで非常に話題になっている本にターゲットを絞り、そのような本を選んで紹介する会に作り替えるようにしました。

後期の活動は以下の通りです。

第4回目 日時：2011年10月20日（木）時刻は上に同じ

場所：「カフェ・ド・セラ」

本：小出裕章『原発のウソ』<sup>vii</sup>

プレゼンター：新井健太

参加者：金井・寺口・松村・張（齋藤）・山口・高玉・新井・千葉・川田

内容紹介：カフェ・ド・セラでリベンジを図るべく、今回はソフォモアのメンバー全員でゆき、より一層力を入れて、お客さんたちに参加をお願いしました。その結果 2 名のレディが参加してくれました。本の内容的に硬いかなと思っていましたが、予想外に男性ではなく女性の方が興味をもって頂きました。このお二人は、太田タイムスの記事をご覧になり、我々の企画には前々からご興味があったとのこと。うれしく思いました。

お話を始めると原発に関心を持つ、その訳がよく分かりました。皆さんの子供さん夫婦やそのお孫さんが千葉に住んでいて、一時期は停電やら水不足やらで、大変だったということ。ニュースなどでそのようなことは聞いてはいましたが、やはり身近に経験した人の話は迫力があり、改めて原発をまじめに考えたいと思いました。

第 5 回目 日時：2011 年 10 月 21 日（金）時刻は上に同じ

場所：「Guitar Research Wood Stock」

本：山本紀夫『ラテンアメリカ楽器紀行』

プレゼンター：鄭詠澤

参加者：福田・矢島・荒岡・田中・鄭・小野関・中澤（伊藤先生）

内容紹介：もう一度同じ本で同じ鄭君のプレゼンで挑戦してみました。残念ながら、今回もお店にはお客さんが一人もおらず、我々とオーナーご夫妻との会話になってしまいました。さすがに同じ本を 2 度読み合わせると、理解は進みます。しかしやはり市民の皆さんと語り合えなかったのは、寂しく、メンバーの中からは、「ウッドストック」でカフェを実施するのはもう無理なのではないかという、弱気な発言もありました。取りあえず、伊藤先生に従って、もう一度このお店で挑戦してみようということになりました。しかしソフォモア・セミナーの方では市民との交流に成功しているのに我々演習 I・II グループは、まだそれが全然できていないということに、とても焦りを感じました。

第 6 回目 日時：2011 年 10 月 27 日（木）時刻は上に同じ

場所：「JAZZ&COFFEE N」

本：結城和香子『オリンピック物語』<sup>viii</sup>

プレゼンター：寺口

参加者：寺口・張（齋藤）・山口・高玉（伊藤先生）

内容紹介：今回は合わせて 4 名の市民の方々と、オリンピックについて楽しく語り合うことができました。皆さんとくにドーピング問題とか、オリンピック・ビジネス（放送権料など）に関心を持ったようでした。

途中で、近くで開業されているという内科の先生がビールを楽しみにいらっしやいまして、話は一気に東京オリンピックの思い出話一色になってしまいました。これは予想外の展開でしたが、このようなハプニング的要素もまた、カフェではつきものと実感しました。今日のコーヒーはなぜか特においしかったです。

第 7 回目 日時：2011 年 11 月 18 日時刻は上に同じ

場所：「JAZZ&COFFEE N」

本：ウオルター・アイザックソン『スティーブ・ジョブズ』（I）ix

プレゼンター：参加者全員で分担

参加者：田中・木村・鄭・荒岡・小野関・福田・矢島（伊藤先生）

内容紹介：今回は演習 I のメンバー 7 名が JAZZ&COFFEE N を訪れ、4 名の市民の方々と交流することができました。うちお一人は途中で退席されましたが、3 名の方々は時間いっぱい残っていただき、メンバーと和やかに会話を楽しんでくださいました。

3 名のうち 2 名は以前この店でお見かけしたご常連さんでした。このイベントに参加するためお運びいただいたそうで、ようやくこの会にもリピータが付くようになったことになり、嬉しく思いました。もっともそのうちの一人は、例の太田タイムスの記者さんでした。

残るお一人は、初めてお見かけする方で、ミサワ・インターナショナル顧問の石橋さんとおっしゃいました。東洋大学の白山キャンパスで、かつて経営学の講義をしていた経験をお持ちとのこと、学生にとくに親しく語りかけていただきました。嬉しい出会いでした。

ジョブズの人柄や、PC が社会にもたらした功罪について、皆さんの年長者らしい中庸をわきまえたお話が聞け、メンバー一同感心した様子でした。

興味深かったのは、ジョブズが何年もの間自分の子と認知しようとして、認知した後もしばらく合おうともしなかった娘リサの名を、こともあろうに自社（アップル）の新しく立ち上げた製品名に採用した点についての議論でした。本の著者はこのエピソード

ドをジョブズという人物の変人ぶり、気まぐれさを示すものとして紹介し、その場では「やはり天才は変わっているなあ」という結論に一同達しようとしていたところ、常連のお一人が、異論を立てていただきました。

むしろそれは彼の、不遇な娘に対するせめてもの贖罪の気持ちの表れ、あるいは親として未だ見ぬ娘への熱い愛情を物語るものなのではないか、いろいろな感情の交錯で、認知したり合ったりすることができなくとも、親というものはそんなものではないか、と提起していただきました。

要するにこの本の著者のジョブズという人物観察には、浅い部分があって、まだまだ深い洞察を加える余地があるのではないかと、面白い課題提起ができました。

このような展開こそ、われわれがこのイベントで実現したかったことのひとつだったので、非常に嬉しくまた手ごたえを感じながら、大学に戻りました。

なお石橋様はとくに感想を寄せていただき、「非常に有意義な時間を過ごすことができました。次の機会も是非参加したいと思いました。」と述べられています。

第8回目 日時：2011年11月24日（木）時刻は上に同じ

場所：「カフェ・ド・セラ」

本：ウォルター・アイザックソン『スティーブ・ジョブズ』（I）

プレゼンター：参加者全員で分担

参加者：新井・千葉・寺口・松村・張（齋藤）（伊藤先生）

内容紹介：今日の午後、『ジョブズ』書評会の第2回目を、「セラ」で実施しました。参加学生5名に対し、市民3名と、途中からオーナーも仕事がお忙しいにもかかわらず参加していただきました。

参加していただいた市民のうちお一人は、チラシをご覧になり、前々から参加を楽しみにしていたとのこと、わざわざ職場からお運びいただきました。残り2名の方は、偶然その場でコーヒーを楽しんでいたところ、われわれに捕まってしまった「不幸な方々」でした。

皆さんこの伝記が話題になっていることや、ジョブズという人物とアップル社についてはご存知でしたが、本の内容までのご存じなく、まずは話題の新刊書の紹介という点でも、地域に少しは

貢献できたかなと思います。

今回はとくにコミュニケーションとIT技術との関係が話題にのぼり、かつては喫茶店こそが学生・若者の情報・知識交換の場だったのが、今では携帯がその場を奪ってしまったことが、（年長者の）皆さんには如何にも嘆かわしいこととされたのに対し、学生の（とくに松村君の）方から（無謀にも、「そのほうがずっとスマートに感じられる」という）オブジェクションが出されるなどして活発な意見の交換がありました。

偶然居合わせたお一人の女性は、反体制派シンガーとして知られるジョン・バエズとコンピュータ産業界を牛耳るジョブズとの異色の交流に興味引かれた模様で、それについては伊藤先生が、PC技術は合衆国の軍事技術と反体制思想との結合といわれている事情をご説明しました。（そのハナシはいろいろあらぬ方向に展開し、結局本学の安齋先生がいつもジーンズを愛用していることへの言及で終わりました）

もうお一人の紳士は、（カフェイベントのお約束にて、お名前はあえてお聞きしなかったのですが）長年東京の某大学で経営学の教鞭をとっておられ、退職後郷里の太田に隠棲されていると自己紹介されましたが、以下のような感想を口頭で述べられました。

このようなイベントは現役時代に自分は考えもしなかったことで、非常に興味深くまた感動した。経営成功の要諦は、とにかくトップがゆるぎない「信念」を持つことで、ジョブズという人物には、その点で大変興味が湧いた。このことは経営だけでなく人生すべてにわたって言えることなので、学生の皆には「信念」をもって社会に出て欲しいし、このイベントもまた「信念」をもって続けてもらいたいと切に願う。機会あれば、今後も参加したいと思う。

以上大変ありがたい感想をいただきました。このような「たまたま偶然」の出会いに、お互い思いがけない発見をすることが、カフェイベントの真髄であり醍醐味ですので、この点でも今回は大変意義ある会だったと思っています。

第9回目 日時：2011年12月1日（木）時刻は上に同じ

場所：「Guitar Research Wood Stock」

本：ウオルター・アイザックソン『スティーブ・ジョブズ』（Ⅱ）\*

プレゼンター：参加者全員で分担

参加者：山口・川田・高玉・金井（伊藤先生）

内容紹介：『ジョブズ』伝記の書評カフェ3回目をWOODSTOCKで、実施しました。今回は偶然居合わせた「坂本」さんとおっしゃる自称「旅の人」と、嬉しいことに本学学生で当ゼミ員ではない2人が、うわさを聞きつけてわざわざ駆けつけてくれました（経済4年の堀込君と法学部の、名前はとくに伏せて欲しいと言われた、学生でした）。

だんだんメンバーもやり方を心得はじめているようで、各担当のプレゼンテーションも、それぞれ自分なりに「つかみ」をアピールし始めており、7月に企画を始めた頃に比べて格段に聞きやすくなっていました。

今回はiPodやiPhone, iPadといったアップルが開発した新製品についての話が多かっただけに、メカニカルな話が多く出されました。とくに最後にプレゼンをした金井君は、ご自慢のiPhoneを手にも実際にみんなの前でいろいろ操作・実演をしてくれたので、（他の人々は私も含め皆もっていませんでしたので）本で書かれていることが、非常に理解しやすくなりました。これもまたプレゼン技術の向上を示すものと、頼もしく感じました。

「坂本」さんと飛び込みの2人の学生は、熱心にメモをとり、プレゼンの合間・合間に鋭い質問を投げ掛けていただき、適度の緊張が保てたと思います。

質問としては、ジョブズという人物は、要するにいったい何者なのか、技術者なのか経営者なのか、というのがありました。

われわれの返答：どちらでもないと思う。結果としてアップルの経営には大成功したが、その過程で部下をリストラするときの無残さ・残酷さは、経営者としてはどうかと思うし、工学的知識という点でも、こちらはバリバリのエンジニアだったビル・ゲイツからさんざんに馬鹿にされている程度のものであった。答えとしては、IT産業に君臨していたクリエイターというのが、実際のところではないか。

そのほか議論の焦点になったのは、アップルの製品をもって

いるということに、自分のセンスのよさを何気に主張するような意味合いがあるのは何故だろうか、というかなり高度な問題でした。社会のムードとか経営戦略とかいろいろなレベルの要素がそこにあるようでした。CMのせいでは？など幾つかの提起はありましたが、その場ではどうも決定打になるような物は出ませんでした。

もちろんすべての課題に、取ってつけたような結論をつける必要はない訳で（とくにこのイベントでは）、参加した一人一人が、これから考えるための材料になればよいと思っています。（それにしても気になるころではあります。経営の方の先生方で、お詳しい方はいらっしゃることと思いますが・・・）

最後に「坂本」さんより、数十年前の学生時代のゼミ活動をありありと思い出すことができた。久しぶりに大いに勉強になり、とても楽しかった。学生さんたちは、しっかり勉強し、良い仕事を見つけてもらいたい、とコメントをいただきました。

またオーナーからは、実は今回知り合いの毎日新聞の記者が、この企画に大変興味をもち、来ることになっていたのだが、用事ができたとのことで、残念ながら今回は欠席したのだと言われました。確かに一面それは残念なことではありますが、新聞関係からそのような関心を持っていただけしたこと自体大変光栄なことと思いました。なおその記者さんは、機会あれば別の機会に参加したいとも言っていたようでした。

第10回目 日時：2011年12月9日（金）時刻は上に同じ

場所：「JAZZ&COFFEE N」

本：ウオルター・アイザックソン『スティーブ・ジョブズ』（Ⅱ）

プレゼンター：参加者全員で分担

参加者：木村・鄭・田中・小野関・矢島（伊藤先生）

内容紹介：『スティーブ・ジョブズ』書評カフェ最終回の第4回目（JAZZ&COFFEE Nにて）についてご報告します。

参加メンバー5名で、3名の市民（レディ）と交流を行いました。3名の方々の内訳は、まずもう半ばご常連になりつつある太田タイムスの記者さんとお連れさん、そしてやはり記者さんのお話を聞いて駆けつけていただいた方でした。いわばリピータとリピータが連れてきた方々という、全く嬉しいパターンでした。

これに何人か飛び入りの方がいれば、ほとんどこの企画の当面の目標は達成されたこととなります。

プレゼンターの一人だった鄭君がジャズ研で、議論に入る前から、彼と記者さん、マスターの間で先日のフェスでの彼の演奏などについて話が弾み、良い雰囲気のカフェが始まりました。今回はとくにテレビ番組のように発表ボードを作り、プレゼンターにはそれを持たせて発表させたので、市民の方々も、それに即してメモを十分に取ることができたようでした（ちなみにメモ用紙をお配りしました）。

今回は功なり名を上げたジョブズの人生の最後の部分だったのですが、まずやはりiPadやiPhoneに話題が集まりました。とくにグーグルが、iPhone技術のノウハウを知っているアップル幹部を引き抜いて、「アンドロイド」を発売したことに、ジョブズが激怒し「アンドロイドは水爆を使ってでも、抹殺する」といったくだりに（本では実にコミカルに書かれていたので）、「そりゃやりすぎだろう」と一同大笑いだったのですが、マスターがそれに対しボソッと「リーダーはそれくらいやらないと、人はついてこないんじゃない？」とソフトに意見してくださいました。

つまり、組織のトップとして必要な演技だったのではないかと、本では示されていない解釈がまた示されたこととなります。この本ではジョブズという人物を気難しい気まぐれな天才肌の男というイメージで（もちろんがちがちの硬い人ではないことを踏まえながら）一貫して捉えています。

しかしもっと人間として深読みや洞察を加える余地がいろいろありそうだというのが、どうやら今回4回にわたってジョブズの伝記を、市民の皆さんと書評した結論になりそうです。

また太田タイムスの記者さんは、面白い問題提起をしてくれました。ワードなどのタイピング原稿作成が広まったため、確かに自分たちのような仕事はとともやりやすくなったが、手書き原稿の時にはいったん文章全部を頭で考えてから書いたのに、いまでは何も考えずにいきなり思いつくことからどんどん書き始めている。だから今度は加筆修正のほうでだいぶ時間をかけなければならず、結局原稿作成という点では、どれだけ時間が節約になっているのか、疑問であると、されました（その口ぶりから、どうも彼女はかなり記者としてのキャリアをいろいろ積んできた方とお見受けしました。これも思いがけない出会いです。）



このハナシには、思い当たる節があります。ジョブズ第1回目はやはり同じお店で、記者さんも同席で行われたのですが、そこで伊藤先生が、手書き原稿とタイピング原稿とは、何か文体が違うような気がする、どちらかという手書き原稿の方が自分は読みやすいと思う、という感想を述べたのですが、どうも記者さんはそれを覚えていてくれて、このような提起をされたのだと気が付きました。

このようにコミュニケーションの蓄積が、こんなささやかなイベントにおいてでも既に始まっていることに、大変驚いているところです。やはりなかなかJAZZ&COFFEE Nの議論は、レベルが高いようです。

第 11 回目 日時：2011 年 12 月 22 日（木）時刻は上に同じ

場所：「JAZZ&COFFEE N」

本：竹内一正『スティーブ・ジョブズ vs. ビル・ゲイツ』xi

プレゼンター：参加者全員で分担

参加者：寺口・高玉・山口・金井・松村・千葉・新井・張（齋藤）（伊藤先生）

内容紹介：カフェ番外編は、大変な盛況で終わることができました。今回は計6名の市民の方々と交流することができました。うちおひとりFM群馬アナウンサーの大門雅明さんで、ほか5名はいつもの常連さんたちでした。（これもいつものように太田タイムスの布施島様ありがたいことに自ら動員して下さった模様でした。もっともご本人は、今回は登場しませんでした。）

とくに大門さんが加わって下さったことで、いつもにはない盛り上がりようでした。さまざまな方向から話題と質問を互い違いに重ねながら繰り出す手法は、さすが会話のプロでした。そればかりではなく、大門さんの発言からは、場数を踏んだしかも信頼のおけるジャーナリストということが明らかに見て取れました。

まずご自分の大学時代を考えると、学友だけでなく地域の異なる年齢の人々とこのような垣根を取り払った雰囲気でも語り合える機会があることは、大変にうらやましいことと思うと述懐されました。

その上で、このような話し合いをした感じと、メールなどで交信しているときとでは、何か違う感じがしないだろうか、皆に問いかけられました。生まれながらIT環境の中で育っている我々には意味がよくわか

らず皆ポカンとしていましたので、大門さんは微笑しながらこう諭されました。

メールなどIT機器だけで繋がろうとする若い世代の傾向は大変危険だと思う。本当に物事を習いたいと思うならば、やはりそれを知っている人・経験を持つ人の下に、自分で訪ねてゆかなければならない。それはいくら技術が発達し、交流がし易くなったからといって変わるものではないように思う。

ラジオのような仕事をしていると、言葉を発することの恐ろしさは身に沁みている。自分のマイクでの発言が聴取者の思わぬ解釈を招く危険には、いつも注意している。言葉とはこのように難しい側面をまた持っている。そこでは言い表せられないさまざまな物事があり、それは自分で身体を動かして調べてみないことには分からない、ということ十分に考えてほしい。

この点については、参加して下さったほかの方々も、大いに賛同されました。それに対し不屈の松村君は、では何でも教えを乞うということでもいいのですかと問いかけたのに対し、大門氏さんは、人と相対するときには、グーグルなどで検索するのと違い、十分準備を尽くさなければならないと説かれました。自分で散々調べてみた結果分からないことなら、人は喜んで教えてくれる。

自分の手間を惜しんで聞いてみるという態度では、人は機械のように動かない。学ぶというのは手を尽くすことだとされました。

最後にわれわれひとりひとりに感想をインタビューされ、カフェは終了しました。FM群馬での放送は、翌週木曜日29日朝の8：20からのコーナーで実施されました。

本来この11回目で、今年度のカフェイベントは終了し、総括の作業に入る予定でした。しかし2012年の年明け後に、懇意にしてくださった上毛新聞太田総局所属の和田記者より、機会あればイベントの様子を取材したい旨、学園企画広報室を通してお申し出でを受けました。メンバー皆で相談のうえ、打ち上げも兼ねて、最後にもう一度カフェイベントを実施することにしました。

今回は、打ち上げも兼ねてということもあり、楽しく音楽を流しながら語り合う会にしようという趣旨で、実施しました。

第12回目 日時：2012年1月26日（木）時刻は上に同じ

場所：「Guitar Research Wood Stock」

本：Eiichi Ohtaki『The Road to Rock』（commons schola, 2011年）xii。

プレゼンター：参加者全員で分担

参加者：寺口・高玉・山口・齋藤（張）・金井・松村・千葉（伊藤先生）

内容紹介：今回は場所が音楽スタジオ兼楽器店ということもあり、何かポピュラーミュージック絡みの良い題材はないか探していたところ、偶然見つけた『Road to Rock』を取り上げました。急ぎよ企画したので、十分な広報の時間が取れなかったこともあり、市民の参加は上毛新聞の記者和田さん1名だけでした。

しかし今年度プロジェクトスタッフの打ち上げ会でもあり、それはそれで音楽を流しながら楽しく過ごすことができました。とくにおうちの事情からこの3月で退学する寺口さんも来てくれ、皆と飲み物を手に実に楽しく談笑してくれましたので、とてもよかったです。

会では50年代から70年代にかけてのロックミュージックの変遷を、実際に曲を聴き比べながら体験しました。この音楽がクラシックなど他の音楽ジャンルと異なり、あるフォームに次々と様々なヴァージョンを重ねてゆきながら進化してきた歴史があることを（そういう意味ではロックはある種様式美の世界だということ）ともに理解しました。

齋藤君など多数派は後の時期の華麗でアップテンポの「アゲアゲ」ムードの曲作りが好きだとしましたが、松村君や寺口さんはオールデイズのゆったり・ゆったり感が好ましいと意見が分かれ、盛んな議論になりました（もちろんそれは個人の趣味の問題ですけれど）。

最後に和田さんからインタビューを受けまして、来年もこの企画は継続すること、その際には書評カフェばかりではなく、本格的「アカデミック・カフェ」らしさを追求し、ゼミで調査・研究したことを発表することも考えたいこと、などをお答えしました。

### Ⅲ プロジェクトの成果と課題の考察

#### 1) プロジェクトの成果

当初我々には太田市内でカフェイベントなどが本当に実現可能なのか、まったく見当もつかなかつたですし、正直なところ見通しもないまま見切り発車したというのが、実際でした。結果的には、上で報告したように、全部で 12 回ものイベントを実施できました。これがまずは、形の上では最大の成果と言えるでしょう。

しかし内容が伴わなければ、いくら回数をカウントできても何もなりません。やはり回数を重ねるにしたがって、宣伝・広報の仕方、お店との事前打ち合わせ、当日居合わせたお客さんへの勧誘、プレゼン、そして議論など、いろいろ学ぶことができました。また学内やアルバイト先、あるいはそれぞれの実家などでは聞けない、聞きにくい話なども率直に聞いたことは、予想外の収穫でした。さらに後期からは今話題の本や今注目を集めている話題について書かれた本などを意識して取り上げましたので、市民の方々にも関心を持っていただき、新しい情報の提供が少しはできたかな、とも思っています。

#### 2) プロジェクトの課題

課題としては、まず話題の本の「書評」という今の形から、どのように次のステージに進むかという点です。アカデミック・カフェは、上で説明した通り、いろいろな形のあるイベントです。「書評カフェ」は、その中でも最も簡便で取り組みやすい形のもので、しかも既に一般で話題になっている本を取り上げるわけですから、いろいろな面でやり易い。けれどもそこで留まっていたら、太田市に新しい文化の風を送る仕事としては、全く不十分だと思えます。今後は本格的なアカデミック・カフェを太田市で実施するため、テーマの選定、講師の選定と交渉、場所の確保、事前宣伝、当日の進め方等等、いろいろまた試行錯誤しながら挑戦してゆきたいです。

#### 文献リスト

- ・岩崎夏海『もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら』(ダイヤモンド社、第 1 版第 28 刷 2011 年)。
- ・ウォルター・アイザックソン『スティーブ・ジョブズ』(Ⅰ)(講談社、初版 2011 年)。
- ・ウォルター・アイザックソン『スティーブ・ジョブズ』(Ⅱ)(講談社、初版 2011 年)。
- ・Eiichi Ohtaki『The Road to Rock』(commons schola, 2011 年)。
- ・小出裕章『原発のウソ』(扶桑社、初版第 5 刷 2011 年)。
- ・竹内一正『スティーブ・ジョブズ vs. ビル・ゲイツ』(PHP 研究所、第 1 版第 2 刷 2011 年)。
- ・村上春樹『1Q84』(新潮社、第 1 版第 32 刷 2011 年)。
- ・山本紀夫『ラテンアメリカ楽器紀行』(山川出版社、2005 年)。
- ・結城和香子『オリンピック物語』(中央公論新社、2004 年)。

## 担当教員の講評

2011 年は、太田市で初めてアカデミック・カフェが試みられた年として、記憶されてよい。外部の人々からは、工場のばい煙とトラックの轟音と排気ガスとが充満した殺伐とした工業町というイメージで、この町はしばしば語られてきた。

しかし今回学生たちとのカフェイベントで発見できた最大のことは、この町には非常に豊かな文化的土壌がしっかりと備わっているということである。私と学生たちとの企画が、いかにも拙劣極まりないものだったことは、本文で十分にお分かり頂けることと思うが、それでも 1 年間に 12 回という、予想だにできなかった回数のカフェを実現できたのは、ひとえに太田市の文化的懐の広さと深さとであった。

来年度以降も、もしわれわれにそれが許されるならば、カフェイベントをさらに充実したものに育て、太田市を近隣の諸都市も羨む名実ともに文化豊かな街にする事業に少しでも貢献したいと思う。そうなれば、この初年度の情けなくも拙い我々の試みも、なにがしかの価値があったということになるだろう。

伊藤栄晃

---

<sup>i</sup>Wikipedia 「哲学カフェ」項目参照

<sup>ii</sup>Wikipedia 「サイエンス・カフェ」項目参照

<sup>iii</sup>読売オンライン 2009 年 6 月の記事より

<sup>iv</sup> 岩崎夏海『もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら』(ダイヤモンド社、第 1 版第 28 刷 2011 年)。

<sup>v</sup> 村上春樹『1Q84』(新潮社、第 1 版第 32 刷 2011 年)。

<sup>vi</sup>山本紀夫『ラテンアメリカ楽器紀行』(山川出版社、2005 年)。

<sup>vii</sup> 小出裕章『原発のウソ』(扶桑社、初版第 5 刷 2011 年)。

<sup>viii</sup> 結城和香子『オリンピック物語』(中央公論新社、2004 年)。

<sup>ix</sup> ウォルター・アイザックソン『スティーブ・ジョブズ』(I) (講談社、初版 2011 年)。

<sup>x</sup> ウォルター・アイザックソン『スティーブ・ジョブズ』(II) (講談社、初版 2011 年)。

<sup>xi</sup> 竹内一正『スティーブ・ジョブズ vs. ビル・ゲイツ』(PHP 研究所、第 1 版第 2 刷 2011 年)。

<sup>xii</sup>Eiichi Ohtaki 『The Road to Rock』(commons schola, 2011 年)。